備陽史探訪
記念80号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL.(0849)53-6157

永禄二年篠津原合戦記

田口 義之

戦国たけなわの永禄二年（一五五九）六月のこと、備後国怒可郡西條の城下は、時ならぬ人馬のいななきでごった返していた。当地の大富山に城を構える宮上総介景盛が、西隣の恵蘇郡本郷の城主山内隆通と長年の領地争いに決着を付けるべく、配下の諸侍に動員令を発したのである。目指すは山内方が城を構える、西南方約二里の三上郡高荘篠津原であった。

両者の間にわだかまった怨恨は相当根深いものがあった。発端は当時備後きっての名門として、室町殿の初めより威を振るっていた宮家の滅亡にあった。永禄二年をさかのぼること二十余年前、備後は中国山脈を越えて南下を繰り返す出雲の尼子氏と、防長から京都を目指す大内氏の勢力が激突する戦乱の巷にあった。

この情勢の中で、宮家の惣領、下野守親忠は尼子に味方し、大内に味方した景盛の親興盛によって滅ぼされたのである。景盛の家は、元々怒可郡久代で僅か千二百貫を領する宮家の一庶家（久代家と呼ぶ）に過ぎなかったが、これによって一躍山内家と肩を並べる備後の有力国人となったのである。

この久代家の勢力伸張は、大富山の西方に居城を構える山内家にとって大きな脅威であった。久代家は郡境を越えて山内領の三上郡高荘に侵入を謀った。高荘は元宮家の領分に含まれていた、というのがその理由である。

山内家は、この久代家の侵略に対して大規模な山城を築いて対抗した。それが景盛の攻撃目標となった篠津原の雲井城であった。同城は、上方から「城作り」を招いて築城した山内家自慢の山城で、比高およそ百七十間という山頂本丸には、二間丈の石垣を巡らし、重臣の田中河内守に兵四百を与えて守備につかせた。

さらに、山内家では、隆通の義母が宮家最後の当主親忠の忘れ形見に当たることから、久代家に新たな攻勢を仕掛けた。断絶した宮家の所領は、すべて唯一人の血縁、親忠の娘の婚家山内家が相続するべきだとして、旧備後守護の山名家や備後に勢力を伸ばしつつあった毛利元就にこの要求を認めさせたのである。

この山内家の「筋目」を通した新たな攻勢は、景盛に大きな衝撃を与えた。なにしろ久代家は一庶家の分際で、本来下知に従うべき惣領家を断絶に追い込んだのである。久代家でもこの弱みは十分承知して、幕府に「宮物領職」の安堵を度々嘆願した。しかし、この要求は「筋目」を重んじる幕府の容れるところでは無かった。

意を決した景盛は、最後の手段にでた。それが今回の出陣であった。六月十七日の早朝、大富城下に勢揃いした久代家の軍勢は約七百、このうち三百を景盛自ら率い、残りは家老の奥宮豊後が大将となって団司河原に陣取り、山内家の反撃に備えた。景盛率いる久代勢は、まず南の山を越えて三上郡の本村に侵入して、南から篠津原を目指した。正面攻撃の不利を避け、側面から奇襲を仕掛けようとしたのである。

久代勢の奇襲は成功した。思いもかけぬ南からの攻撃に山内勢は一瞬浮き足だった。久代勢は怒濤の如く篠津原へなだれ込み、その先鋒は雲井城の城壁に迫ったのである。中でも弱冠十八歳の若武者松本源次兵衛の活躍は目覚ましく、山内家にその人ありと知られた上谷六左衛門を討ち取り、敵味方の賞賛を浴びた。

景盛の感状に曰く

今度三上郡高庄篠津原に於いて合戦候処　一番槍比類無く候　感悦の余り　太刀一腰青銅百疋並びに三百疋の在所を以て之を遣わし候いよいよ忠義歓悦たるべく候

恐〻謹言

永禄二年六月十七日　景盛　判

松本源次兵衛殿

しかし、久代方の攻勢もここまでであった。山内家が畿内から城作りまで呼び寄せて築いた雲井城の防備は極めて堅固で、攻めあぐねるうちに、急を聞いて駆けつけた山内勢が久代勢の背後を突いたのである。勝敗は一気に逆転した。久代勢は前後に敵を受けて崩れたった。景盛を先頭にした久代勢は、一丸となって西條川の河原に降り立ち、上流の大富山を目指して潰走を始めたのである。

合戦の戦機は一瞬で決まる。ここで山内勢がそのまま逃げる久代勢に追い討ちをかけたとしたら、大将景盛を初め、久代勢はほとんど討ち取られ、大富山も山内家のものになったかも知れない。

しかし、山内勢はそうしなかった。一旦城に入った山内勢は、大将隆通の命を待ち、その下知によって追撃を始めたのである。瞬時の差で久代勢は命拾いをした。久代勢を追った山内勢は、折りからの増水で西條川を渡りあぐねているうちに久代方の後詰、奥宮豊後率いる四百の軍勢によって進撃を阻止されたのである。

川を挟んで両勢のにらみ合いが続いた。そこに現れたのが安芸の毛利元就の使者である。既にこの時期、備後は毛利氏の勢力下にあり、久代家、山内家双方ともその麾下に属していたのである。元就の使者は両陣営に和議を呼びかけた。

毛利氏としてもこの両家の争いを見逃すことは出来なかった。元就はこの時期、出雲の尼子氏の攻略に取りかかっており、尼子氏と接する久代・山内両家の争いを好まなかったのである。

元就の使者は、両家の家老の前でおもむろに元就の書状を聞き、和議の条件を示した。

一、高荘は三上郡の内にあり、山内家が相違なく知行し、今後一切久代家の異議を認めない。

一、その代わり、久代家には備中国井原荘を与え、毛利家としてその領有を保証すること。

両家とも毛利家の調停とあれば、異議はない。両家老とも謹んでこの和議を受け、誓書を元就に差し出すことを確約した。

こうして、中国山地のただなかで起こった小さな合戦は幕を閉じた。しかし、僅か四、五百の兵力で戦われたに過ぎぬ合戦ながら、その痛みは後々まで両家の中に残った。

久代家では、それまで青年武将として家中の期待を集めていた景盛の酒乱が始まったのは、合戦後のことであった。山内家でも、その後篠津原に居住した隆通の甥が本家乗っ取りを謀ったのも、同地に雲井城という、本家の城を凌ぐ、堅固な山城があったればこそであった。

（筆者註）

『久代記』『芸藩通史』その他関係記録を基に、一部筆者の想像を加えたもので、通常の学術論文ではないことをお断りする。

おとはしぐれか
―春・夏・秋・冬

石井 良枝

数年来の私の楽しみは、某画廊からの展示案内の葉書が届くと、月に一、二度出かけることでした。玄関を一歩入ると、永年にわたる主夫妻と作家との親交の中で選ばれた作品の一つ一つが、その独創の力と輝きを放ち、私に語りかけてくるのです。

一年〈春・夏・秋・冬〉と一週間を周期として、金工あり、陶芸あり、版画あり、水彩画あり、油絵あり、紙細工あり、木彫あり、ガラスワークあり、ブロンズあり、テラコッタあり、布衣あり、藍染ありと、私にとっては等身大の美術館とでもいうべきか。日暮れ時、バス待ちの間のひとときを一人で身をそこに置くのが常でした。そんな時に「いいでしょう」と風のように声をかけてくれる女主人でした。

水無月の夕暮時、突然に女主人の死が知らされました。三週間ほど前に久しぶりに逢って食養生のことなど話をしたのが最後になりました。その日は画廊の休日でした。家族三人で展示のために荷ほどきをしていたその場に、私は行き合わせました。

箱の中の〈小さな黒い俑〉女子像と出会い、その豊かな実在感に魅せられ、「私の神にしたい」と言い、両手のひらの中に隠れてしまうほどの俑を、しばらく手もとで眺めて暮らしました。この俑は、私の元を離れて女主人の側で、その役目を果たして本当に私の神となりました。

いつも実に物静かで細身な黒い服のよく似合う女主人でした。東北の人だったと知ったのは通夜の時でした。そして「上等な人だった」と私も思います。

紅葉したモミジやイチョウやムクやケヤキやクヌギやカシの葉が風に吹かれて降るように散り敷く時、パチパチと木立の中で冬の音をたてています。画廊の壁の小さな掛花入れに赤い藪椿が咲いていました。

〈おとはしぐれか〉山頭火と無造作に墨書され、丸々としたミミズクも描かれています。今年は、わが家の小間の柱に掛け、濃紅色のサザンカの花を入れました。庭の藪椿は、かたいつぼみをつけたばかりです。

今はまだ同じ画廊の空間が、以前のようには落ち着く場とはなり得ないのです。女主人のいないそこは、空気が違うのです。別の世界のように感じられ足が遠のいているのです。

私は心を開き、淋しさや嬉しさや疲れさえもそこに置いて我家へ帰宅していた自分の姿を思い起こしています。日常の生活の場から大切な人の姿を見られなくなった時、その人がいかに生きて来たのか、共に生きた日々が新たになり、やがて現実に生きることに力を与えてくれることを実感できるものです。

人はなぜ自分が生まれ育った故郷に回帰するのだろうか。それは先祖を想い、父母を偲び、やがて己の生命を根源に生まれ変わりたい願望が根底にあるからだろうか。この夏、人の生と死にこだわりを抱きながら東北への短い旅に出ました。

ナナカマドの色づき始めた街路樹を眺め、足元にはクズの花やハギ、黄のタンポポが地を這うように咲く道の果てに唐突に三内丸山遺跡が築き上げられていました。小さな子供の墓（土器の底に蘇りを願って穴が開けられていた）に驚き、恐山の白く乾いた大地（地獄谷・賽の河原）の広がりに背中を押されるように立ち去り、空と海が同じ青さで一つになった彼方の仏ヶ浦には、そそり立つ石仏があり、海原を見晴るかす小埋もれていた石仏とも出会い、「ありがたいことです」と、お二人自らお接待をして下さいました。そして私に神に身をまかせて山の斜面をお尻で滑り下りることも教えて下さいました。神（仏）の存在を日常生活の中で感謝する心として具現されているお二人は、日を置かずにお礼参りをされ、行方の分からなかった二体の石仏とも無事に出会うことが出来、「ありがたいことです」と私にお礼を言って下さいました。そのお二人とも一年の内に大切な人との別れの時を迎えられました。

人はみな人生の中で一度は神の大らかさの中に抱かれて生かされていることを知らされる時を迎えることになるのだろう。

石造物分布調査継続中

歴民研の石造物分布調査は年内、以下の通り実施します。引き続き加茂町の調査ですが、継続して参加してくださる方だけでなく、新たに調査に参加してみようと思った方もぜひお集まりください。

《実施日》一二月一四日（日）

☆年明けは一月はお休みし、二月から調査を再開します。詳しくは一月の行事案内でお知らせします。

《集合時刻》午前一〇時
（調査は午後三時ごろまで）

《集合場所》賀茂神社
（福山市加茂町芦原）

《その他》
弁当・飲物各自持参。

またまた行ってきました！上方へ
～ぶっ飛ばし軽四日帰り旅行の巻～

山口 哲晶

私は今、酒を飲んでいる。何となれば辛口の日本酒である。年を重ねるとともに洋酒よりも日本酒になじんできた。強い方ではないが、事ある毎に舐めている。お銚子は備前焼と決めている。知り合いの陶工から暖簾の裏でいただいたものである。お猪口も同じ備前焼のぐいのみを愛用している。これは私のこだわりである。今飲んでいる酒は「酔心」である。あの横山大観も終生愛飲していたという三原の酒である。横山大観が？と思われる人もいるだろうが、そうなのです。パッケージにちゃんと書いてある。「横山大観終生愛飲の酒」と、ほらね…。

ま、そんなことはどうでもいい。ひとくち口に含むたびに私の頭は桃源郷の中に誘われていく。そんなひそかな旅をしているときに限り、例の平田氏が「原稿！原稿！」と電話の向こうで叫んで桃源郷の中まで追いかけてくるのである。そういえば彼は、最近私の顔を見る度に「奈良へ行きましょうよ」か「原稿！！」のどちらかの言葉しか吐かなくなっていた。私も私で彼の顔を見るたびに「奈良へ行く、奈良へ行く…」か「原稿、原稿…」の二つの言葉が頭の中を無条件に支配し、「平田」という名前を聞いただけで「奈良へ行く」ことになってしまった。どうやら私はパブロフの犬になってしまったようである。

てな訳で、またまた行って来ました、奈良へ（ほんとはチョッピリのつもりだった大阪府の高槻市も含めてね）。今回のメンバーは、しずしず網本氏、いつも青春赤松さん、信号嫌い平田氏に私、パブロフ山口の四人で「ぶっ飛ばし軽四日帰りパック旅行の巻」を敢行してきたのでした（※注意！ここからは前回の会報、七九号の一二頁をよーく読んでからお読み下さい。なにせ今回行く予定のところについては詳しーく書いてありますからね）。

午前二時半、密かにわが家を出発した軽四平田号は網本氏を迎えに一路笠岡へ、山陽道へと、さらにめざす畿内へとひたすら東上した。案の定、網本氏は風邪を召されている。「コンコン」咳をする。さすが網本さんだ。鼻声だ、ウン、やっぱり網本さんだ。ここ数年風邪を召されていない網本さんに会ったことがないような気がする。どうやら網本氏は風邪菌と共生関係にあるらしい、と風邪をひいている私は思った。

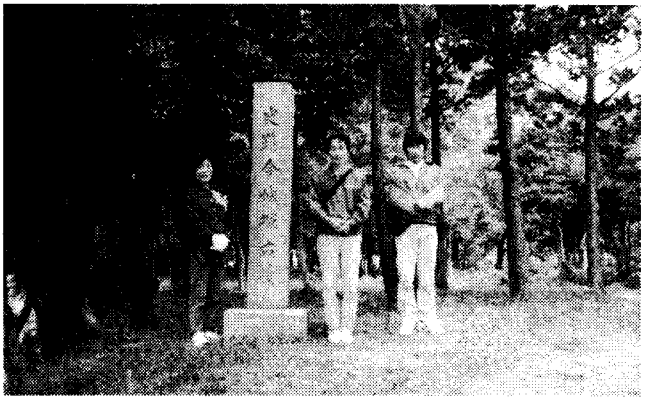
途中二回の休憩をはさんで高速を降りて高槻市内に入ったのは夜が明けたばかりの頃だった。空が明るくなれば活動開始、早速「紫金山古墳」に挨拶する。いつものようにシズシズと徘徊する網本氏、続く赤松さん、ゴソゴソうごめく平田氏。超有名な前期古墳を堪能した四人は車に帰った。七時頃になっていた。

「次だ！次」とばかりに目指したのは大織冠神社、神社といっても後期の横穴式石室を鎌足の墓として奉っているのである。この境内に将軍塚古墳の竪穴式石室が移築されている。探し求めて神社に登って見つけてくれたのは平田氏。「これはいいー、すばらしいー」と声を上げたのは網本氏。写真をバシャバシャ撮ったのは私。これら三人を後目に静かに神社の説明板を読んでいたのは赤松さん。

堪能した後は朝食となった。日溜まりの中、神社の休憩所のような所。メニューは途中に寄ったコンビニ食である。それからは「現」継体陵の太田茶臼山古墳を見て、現在ほぼ確実に継体の墓だと言われている今城塚古墳に向かった。

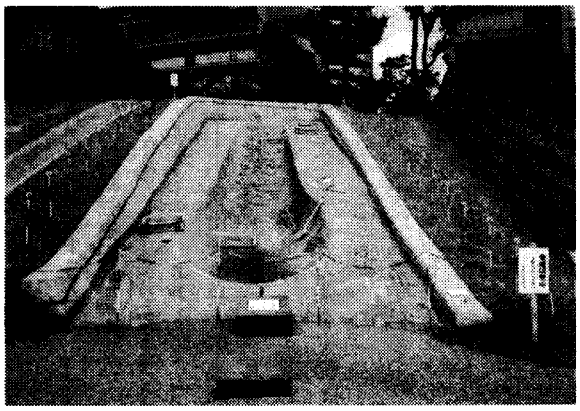
この古墳は濠の形を見ないと古墳だとは思えないほどに境丘は旧態をとどめていなかった。墳丘のいたる所に凹凸があり「第一級の城跡だ」と言ったという中井均氏を誉める気持ちにはなれなかった。濠跡では多くの若者たちがバス釣りを楽しみ、犬を散歩させる人もいた。

うつ向きかげんに歩く私に網本氏はニヤニヤしながら何やら差し出し



今城塚古墳の周濠土塁上にて埴輪破片が多数落ちている。

た。手には茶色い埴輪片が握られていた。それからというもの四人は一斉に地面をにらんだ。すると、ある埴輪片が。露出しているものもあれば地面に埋まったままのもある。タガのしっかり付いたものもある。あちこち探すと径約三十センチ程の丸い穴まである。円筒埴輪の埋まっていた穴だろう。よく見ると丸く埴輪片が未だ埋まっていた。網本氏と「こんなにゴロゴロ転がっているのに誰も拾わないんだね」と話しながらこの古墳と別れを告げた。



新池遺跡窯跡
「発掘調査中」を復元？

それから太田茶臼山や今城塚の埴輪を焼いていた「新池ハニワ公園」に着いた。高層マンションの谷間にあるここは一部発掘現場をそのまま保存している。ここも良く、みんな楽しんで見学した。その後は茨木市の資料館に立ち寄って橿原市を目指した。

昼食も何のそのと平田号は転げるようにひた走る。昼食もとらずに橿原考古学研究所の博物館に着く。中に入ると時間は意味を失っていく。いくら本や写真で見ても実物の迫力にはかなわない。赤松さんは日本一大きなメスリ山古墳出土の円筒埴輪に圧倒された様子だった。ここはいつ来てもいい。

「もう日暮れまで時間がない。次！次！」と平田氏はハンドルを握り、アクセルを踏む。今度は「山辺の道」である。狭い旧道を岸和田のだんじりのように平田号は駆けていく。山辺の道に面している檜原（ひばら）神社に到着。途中のコンビニで買ったおそ～い昼食を車中でみんな食らいつきながらの道のりであった。

檜原神社では「すばらしい！」を連発しながら網本氏がスタスタと奥に消えていった。私はあの右に左に揺れまくる車中で果敢にもカップのソバを食べていたので、そのつゆの残ったカップを捨てるのにあっち行ったり、こっちに来たりしていたので彼らの行動を見失ってしまっていた。三輪山と別れて立ち寄った平田氏推薦の場所では盆地に横たわる箸墓の向こうに二上山がかすみ、今まさに太陽が沈もうとしていた。しばし見とれる四人であった。

最後は「箸墓」で締めくくった。久しぶりだという網本氏とともに池のほとりを歩いてみた。網本氏は箸墓に会って何を思ったのだろうか。その後、平田氏とはぐれてしまった私と網本氏は暮れなずむ他のほとりで迎えを待って、再開後帰福の途についた。かなり訪れることのできなかった古墳もあったが、とてもいい旅であった。この盆地で遠い昔に日本の祖ができたことは事実である。

私は、もう冷たくなった風に吹かれながら日本の祖を生み出したこの狭い盆地を想った。暮れなずむ中、箸墓は輪郭が次第にぼやけてやがて闇の中に同化していった。しばしの間でもこの狭い盆地の中に身を置くことが私にとっては心の桃源郷なのかもしれない。

《追記》この旅を終えて一週間も経たないうちに、もう平田氏から次の「パブロフの犬」攻撃にあっている。

古墳講座Ⅳ　備前車塚古墳登山会

新春の古墳講座は、あの備前車塚古墳（岡山市湯迫）に登ります。

この古墳は、全国最古式の前方後方墳で、三角縁神獣鏡一一面を含む一三面の銅鏡を副葬しており、なんと！全国一二の古墳との分有関係があります。考古学史上の記念碑的な古墳をあなたも訪れてみませんか？

なお、登山時間は約三〇分です。

【実施要項】

《日程》一月一〇日（土）
★雨天中止
《集合時刻》午後一時三〇分
《集合場所》福山駅北口
「福山キャッスルホテル前」
《募集数》限定一五名
《参加費》実費（一五〇〇円程度）
★会員のクルマに分乗。クルマを出してくださった会員は無料。ガソリン代・高速代を分乗した他の3人で分担。資料代・保険料を含みます。
《その他》弁当・飲物各自持参。歩きやすい服と靴でご参加ください。
《受付》山口古墳部会長宅まで。
（☎〇八四九―四五―六一七三）
《受付期間》
一月五日（月）～七日（水）
午後八時～九時（時間厳守）

秋風に吹かれてぶらり散策記

種本　実

☆「歴史リレーフォーラム　元就歴史紀行第十回」

【十月四日午後　リーデンローズ小ホールにて】

広島女子大の秋山助教授と広島大学の岸田教授の講演を聴いた。元就関係の古文書と、陶を討った元就が他の国人を従えて安芸の国を支配するに至る国造りが要旨だった。

講演の後、尼子晴久の妻「みつ」役の岩崎ひろみさんのトークショーがあった。長い足を膝下からブーツに包んだ出で立ちは、ドラマの中では見られない二十歳の青春が溢れていた。駅裏の福山城に感激した、実生活でもお父さん子であり、尼子国久が殺されたときには、寂しさを実感できた、子（義久）役は二十五歳の方だけど、「ママ」と読んでくれるなどと、司会者のNHK女性アナの質問に淀みなく大きな瞳を輝かせて話してくれた岩崎さんの、大器を予見しているのは私だけではないだろう。最後の抽選会で幸運を引き当て、舞台上で記念品を受け取り、岩崎さんの熱い熱い両掌による握手を受けた。帰宅したら、二人の息子が、彼女のサイン色紙に興奮して大喜びだった。

☆郷土料理「うづみ」つくりと史跡めぐり

【十月二十六日　神辺町役場他町内】

「「うづみ」って料理知っている？」と尋ねると、聞いた女性はみんな知っていた。そんなに有名な料理だったとは初めて知った。食欲の秋、おいしい料理を食べ、歴史の勉強も出来ると、当会の方達と共に二人の息子も誘って参加した。神辺町役場から百人の参加者は、四台のマイクロバスに分乗して、午前中は史跡めぐり。本陣、廉塾、菅茶山記念館とめぐる。

ちょうど、町内の秋祭りの日だったので当地の「はね踊り」をみることができたが、笛や太鼓や雛子の声に史跡の説明はよく聞こえなかった。参勤交代の宿場町はさぞ潤ったのでは、と思いきや、地元に払う金高は決まっていて、遥かに足りないぶんは農民達に過酷な負担となっていたとのこと。当本陣は筑前・黒田藩指定の宿だったとか。

廉塾には何度も来ているが、うっそうと茂った木立に囲まれた家屋は今なお当時のままに建っている。本陣菅波家に生まれた管茶山は、中国風に菅波から波を省き、また号は近郊の茶臼山からとったと聞いたことがある。

ちなみに、日本初の地理学者・伊能忠敬一行が塾を訪れたとき、当地の庄家の息子が向学に燃えて弟子になり、後に旗本榎本家に養子に入った。そして後に、旧幕臣でありながら新政府の要職を歴任した榎本武揚が誕生したのである。

菅茶山記念館では、茶山作の漢詩をたくさん目にしたが、浅学の私には猫に小判であった。ほかに、茶山と並んで著名な童謡作家・葛原しげるの偉業に触れることが出来た。彼の作詞した校歌が全国で四百校もあること。その中に私も巣立った福山市立川口小学校の、児童には難解だが未だに忘れてはいない、あの校歌もあることを初めて知り驚きであった。

午前中の史跡めぐりが終ると正午。葛原しげるの代表作「夕日」のメロディが町内に鳴り響く。「ぎんぎんぎらぎら夕日がしずむ……」真昼に聞くと違和感があった。

いよいよ中央公民館で空腹を抱えて「うづみ」つくりの実習である。当日もらった資料によると、この料理は、水野勝成が神辺城から福山へ城を移して倹約を中心とした政策を採ったところ、その風潮の中から生まれたという。

調理実習室には各班毎に、秋野菜（ごぼう、人参、春菊など）に、まつたけ、こんにゃく、こえびなどが山になっていた。みんなでワイワイガヤガヤと調理し、茶碗に注いで新米を乗せ賞味する。ああ、なんとおいしかったことか！！

☆松永の古墳を訪ねて

十一月一日（土）十三時三十分～

古墳部会の現地学習会に今回初めて参加することができた。土曜日の午後の半日は都合がつきやすい。駅裏に行くと、常連らしい会員のみなさんが笑顔で迎えて下さった。車が足りず、ふたり松永駅までJRで、そこから、なんと広島から来たという方も合流して車に乗せていただき、バイクの女性を含め十五名で出発。

長波（おさば）古墳（今津町）は円墳。径一八メートル。崩れかけた横穴式石室の小さな天井穴からやっと中へ入ると意外に広い。石室を構成している石は小さなものばかり。石室が崩れないように断面はドーム状になっている。主は松永湾にのびる眼下の勢力地を見下ろしていたのであろう。

戸田（へだ）一号古墳（東村町）も円墳。径東西一六・二メートル、南北一五・三メートル。荒涼とした丘の頂部に立派な横穴式石室があった。玄室か

から見て、左に門柱状の巨石が立つ、片袖式の石室である。石室内は黄土色の大きな石で構成され、全長九・三メートル、高さ一・七メートルと大規模である。長波古墳より五十年ほど後の年代とのこと。開口部はなぜか真西に向いている。

松本古墳（神村町）は円墳もしくは、北側の小さな造りだし部を認めれば帆立貝式古墳ともいえそうだ。径四八～五〇メートル。広島県史跡となっている。北側の登り口に葺石があった。竪穴式石室がある頂部から埴輪がでたそうである。

ここでは須恵器と土師器の違いなどについて、質疑応答があった。前者は古墳時代に朝鮮半島から渡来した技術者によって伝えられたもので、登窯を用いて約一一〇〇度の還元焔で青灰色に焼きあげる。後者は、八〇〇度前後の酸化焔で焼きあげる。赤褐色の土器で、弥生土器との区別は困難とのこと。

小人数だったから初対面の方とも気さくに会話でき、有意義な現地学習会であった。今後もこのような学習の場に参加したいと思う。

十一月九日に会から行事案内が届きました。年末まで大変盛り沢山の行事であり、お世話をして下さる方々の学習意欲、煩雑な会務への取り組みなどにはいつものことながら敬服します。誰しも同様と思いますが、勤務や家事との諸都合をつけながら、出来るだけ参加したいとカレンダーを見つめています。当会の方々との触れ合いはかけがいのない学習の場です。歴史学習だけでなく、人生勉強の一環として、次回はどの行事に参加できるかと思案しながら拙文を止めます。【十一月十四日】

中世を読む会
『備後古城記』を読む

毎回、約一五名の会員が参加する備陽史探訪の会で最強の学習会です。中心メンバーは毎週のように備後各地の山城を探訪しています。中世の備後の武将と山城に興味のある方はぜひご参加下さい。

【実施要項】

日時　一二月二〇日(土)午後七時。
一月一七日(土)午後七時。

場所　中央公民館会議室

テキスト代　一〇〇〇円
（既購入者不要）

座長　出内博都さん
（城郭部会部会長）

資料代　一〇〇円程度

きけ、わだつみのこえ Ⅲ

石井　しおり

〝きけ、わだつみのこえ〟の表題で投稿された石井さん、私は、夜の春雷の詩を遺して戦死された、あなたの恩師、田辺先生と同郷出身の佐藤と申します」というお電話がかかった。

伺うと、備陽史探訪の会の会員で、もう長らくこちらへ住居を移しているが、田辺先生の妹君の同級生で、とおっしゃる。

驚くことしばし。全く仏縁としかいいようのないお話で、遂には「墓所へご案内しましょう」といわれ、電話が終わった。当日は墓所でも同氏の友人お一方が待っていて下さる手筈とのこと。

私は、すぐ女学校時代の二、三の友人に伝え、墓参することになった。

その日は初冬なれど小春日和のうららかさ、空はすっかり澄み渡り、沿道のピラカンサの可憐な色が、目に染みる。

やがて鄙びた西阿知駅を右に見て、ゆったり流れる高梁川を渡り、行くほどに佐藤氏の友人が迎えてくださる。墓所に目をやると、小ぢんまりとした墓域に、堂々と「田辺利宏の墓」と墓碑が屹立（きつりつ）していた。

四人の教え子たちは、少しでも福山の香を、とたずさえた地元の酒と庭の菊を供御する。

なつかしい先生の御名と、M女学校教師たりし、の碑文を見つけたわれわれは、声もなく、冷たい墓石の文字を撫える。

あわただしい出征を前に、この世の名残りに若い魂をふりそそいで薫育して下さったあの頃。幽明境を隔てて五十数年、あの世から呼び寄せられたのだとしか思われぬこの墓前に深く跪（ひざまず）いた。

四人は佐藤さんに声をかけられて墓所を離れる。

道すがら目に映る高梁の流れは、傾く陽を浴びてキラキラ輝き、瀟洒（しょうしゃ）な船も泊まっている。

師の君の幼い頃、この岸辺で魚を釣り、水遊びをなさったであろう。はるかに続く広い堤防は、飛び跳ねる格好の遊び場だったことだろう。

今、コスモスが無心に揺れている。

あの墓所の並びに、恩師の二十二歳の弟君の戦死の墓標が建っていた。今は亡き御両親はどんな思いで二基の墓へお参りになったであろうか。

〝きけ、わだつみのこえ〟が聞こえてくる。初冬のしじまを透って。

古事記「序」の再考

佐藤壽夫

私たちが学習している『古事記』の「序」について考えてみたい。

まず頭に浮かぶことは、日本史を学ぶ者にとって『古事記』と『日本書紀』は（以下『記紀』と略）身近な参考書だということである。

しかし、現存する最古の史書とされる『古事記』はより古い記録を編集したものである。「現存する」と限定したのは、それ以前にも史書に近いものが編纂されていた事実があるからで、これは『古事記』の「序」にもはっきり書かれている。

大陸との交流が始まると同時に、当時の人々は文字と接した。しかし、本格的に使用されるようになったのは七世紀末以後のことのようである。もちろん、先祖の歴史を記録にとどめておこうという願望は早くから芽生えていた。初めは断片的な簡単な記述から始まったと思う。文字の使用に慣れるにつれて完成された文章を書くようになった。そして、それまでに口承で伝えられてきた祖先の歴史の記述が始まったのだろう。

推古朝（六世紀末～七世紀）になると中国の史書にならって、体系的な史書の作成が試みられた。すなわち六二〇年（推古二八）に聖徳太子と蘇我馬子が協力して編纂したのが『天皇記』と『国記』（併せて『臣連伴造国造百八十部并公民等本記』も）である。この蘇我家に伝わる二つの史書は、当時、木簡の束ではなかったかと思う。この史書のほとんどは六四五年の乙巳の乱（大化の改新ともいう）の最中に、蘇我氏の居館で灰燼に帰したのだが、その一部を船史恵尺が持ち出し、中大兄皇子に差し出したと伝えられている。

『古事記』の編纂は、六八一年に天武天皇（厳密にいえば、この時代は漢風諡号はまだ使用されていない。天皇号は八世紀末の持統朝から使用されるというのが定説）の勅命により始まった。また『日本書紀』も、史書に明確な記述はないが、『続日本紀』や「持統紀」などの記述から、元々は天武天皇の勅命がきっかけで修史事業が始まったと推定される。

天武天皇は稗田阿礼という二十八歳の舎人に、天皇家や諸家に伝わっている『帝紀』と『旧辞』を暗誦させていた。ところが、年うつり変わり、天武より三代後の元明天皇が、七一一年（和銅四）九月一八日、臣太安萬侶に「稗田阿礼が誦むところの勅語の『旧辞』を撰録し、献上せよ」といわれたので、謹んで仰せのままに事細かに採録したと安萬侶本人が「序」に書いている。

天武天皇の勅命があってから『古事記』が完成するまでに三十年もかかった。『記紀』は天武朝には完成せず、持統・文武朝と引き継がれて元明朝の七一二年（和銅五）に『古事記』が、元正朝の七二〇年（養老四）に『日本書紀』が完成したのである。この『記紀』が基にした記録としては『帝紀』と『旧辞』が考えられる。『帝紀』とは、主に天皇家（当時は大王家）の系譜を記録したもので、それに対して『旧辞』は、神話や諸家の祖先の伝承などを記録したものだ。つまり『記紀』は、口伝されたものや、古い記録を参考に編纂されたもので、繰り返すが、完成までには実に三十年から三十九年の期間を要したのである。

ところで、『古事記』の「訓み」だが、成立した時から「コジキ」と呼ばれていたかどうかわからない。これは本居宣長が『古事記伝』の中で『古事記』に対し、「フルコトブミ」という振り仮名を施していることからもわかる。『古事記伝』は本居宣長畢生の大著で『古事記』の注釈書である。一七六四年（明和元）から一七九八年（寛政一〇）にかけて著述され、一七九〇年（寛政二）から刊行が開始された。

この中で宣長は「一、記題号の事」という一章を設け、『古事記』の題号の訓みを「フルコトブミ」とした理由として「古の事をしるせる記といふなり」と述べている。『日本書紀』が「日本」という国号をつけているのに対し、これは「古事」とのみいうのが、異国にへつらわず、天地の極み、ただ天神御子のしろしめす国のほかなき意にかなっていると、国学者らしい解説である。

もう少し『古事記伝』を読むと、「さて、此記（『古事記』）は字の文をかざらずして、もはら古語をむねとはして、古の実のありさまを失はじと勤たるに、序に見え、又次々に云がごとし」

とあるように、日本語の古い言葉がそのままに書かれているというのが宣長の大前提である。

こうしてみると「古事」とは、どんな言葉で記されていたのか、また、どのように口伝されていたのかが疑問となってくる。こう書くと『古事記』の「序」を読みこんだことのある人は、もうその中の次の一文を思い出されているかも知れない。

「上古之時、言意並朴、敷文構句、於字即難」

（原文漢文）

「上古の時には、言葉と心に思うこと（意味）がどちらも素朴であって、これをどのように文を敷き並べたり、句を構えたりする（漢字を使って書き表す）か、なかなか難しい」

（現代語訳）

ここでは「上古の時に、言と意と並びに朴にして」云々と、古い上がれる時代のことを思いめぐらしての発想になっている。

斎部広成が八〇七年（大同二）に著し、平城天皇に献上した『古語拾遺』という史書にも「上古の世に、未だ文字有らざるとき」と記されている。これは『古事記』に「上古の時は、言と意と並びに朴にして」とあるのと思想的には同一のことをいっている、とみて誤りはないと思う。当時の人が「上古」という時を彼らの頭の中で特定し、文字がなかった口承の時代に、ということが『古事記』の「序」からも伝わってくる。

そうすると「上古」の時は何世紀頃までのことかという疑問が湧いてくる。もう少し突き詰めていうと、当時の人達は「上古」のことを、現在でいう紀年で何世紀頃までのことと想定していたかということである。彼らのいう「上古」がまったく歴史的な裏付けを欠く空想の所産と考えにくいものがある。そこでこれについて考えてみる。

『日本書紀』成立の翌七二一年（養老五）に、早くも宮廷で最初の講書（『日本書紀』の講義）が行なわれた。これ以後も嵯峨天皇の八一二年（弘仁三）から村上天皇の九六五年（康保二）にかけて六回の講書が実施された。その弘仁三年の記録とされる「国史体系」所収の『日本書紀私記』（甲本）の序（以下『弘仁私記』序と略）には、「先代旧事」というときの「旧事」ついて、天地開闢から豊御食炊屋姫天皇すなわち推古天皇までのことを指す、という趣旨のことを割註ながらはっきりと書いている。このことは『古事記』の記事の終わりが推古天皇であることと符合する。むろん『弘仁私記』序の著者が『古事記』の内容から、「旧事」は推古天皇までだ、とつじつまを合わせた見解を示しているのかも知れないから、これだけでは何ともいえない。

ここで、ごく簡単に「倭」といわれた日本語圏での文字受容のあらましを再考してみる。

三世紀―前半が邪馬台国時代で、中国大陸の魏との国交があり、遣いが行き来している。倭国のうちの女王国（倭国）の女性酋長（卑弥呼）が「親魏倭王」という称号を得たり、おそらく漢字の銘の入っている鏡をもらったりしている。倭国から遣いに行った者たちは、漢詩を作るなどの文化に触れたはずであるものの、しかしそれは今のところ倭国に持ち帰った気配がない（今後の考古学の発掘成果に期待したい）。

四世紀―もし漢字が使いこなせるようになっていたなら、現在まで残っている前期の古墳から墓碑銘などが発掘されていなければならないが、残念ながらそれもない。

五世紀―後半には埼玉県の稲荷山古墳から出土した鉄剣に、年号である「辛亥年（四七一年か）」ほか、人名の「獲加多支鹵大王（雄略大王か）」など、金象嵌された一一五文字のあることが知られている。また、熊本県菊水町の江田船山古墳出土の鉄剣銘の銀象嵌七五文字にも同じ大王の名が記されていることから、漢字が、大和を中心にみて関東と九州とに広がる勢力の、いわば支配の証として威厳をもって使用されていたのではなかろうか。さらに、和歌山県橋本市の隅田八幡神社に伝世された国宝の人物画像鏡には、年号である「癸未年（四〇三年か）」や「意柴沙加宮」など四八文字が陽鋳されており、この世紀のものとされている。一方文献としては、倭王武（雄略大王か）の上表文（四七八年）が『宋書』倭国伝に掲載されているのが有名である。

六世紀―島根県松江市の「八雲立つ風土記の丘」にある岡田山一号古墳から出土した太刀には、銀象嵌で「各田口臣（額田部臣）」をはじめとして十二の文字が刻まれており、この時期大和政権による部民制が既に出雲地方にもおよんでいたことを示す史料として著名である。年号は不明だが、古墳は横穴式石室をもつ前方後方墳で、その形式から六世紀中葉のものと考えられている。

七世紀―『天皇記』『国記』の編纂、憲法十七条の成立、碑文などの多くの金石文の遺存、戸籍や計帳の作成、律令の制定、暦法の行用、写経や経典の注疏など、政権上層部や知識人や学問僧の間では、ほぼ文字文化の時代に入る。また、初期の万葉の歌も文字文化のおおよその定着と関わりがあるだろう。

こうしてみると、五世紀が漢字文化の初期にあたり、七世紀にはほぼそれが定着しているとすると、六世紀は史料が微少であるにもかかわらず、文字文化が劇しく導入された時代と推測される。

ここでもう一度「序」に戻ると、「先代」という語は「上古」という

語と一組になっていることがわかる。『古事記』の「序」にも「智海は浩汗として潭く上古を探り、心鏡は煒煌として明らかに先代を覩る（智海浩汗、潭探上古、心鏡煒煌、明覩先代）」とある。このように「先代」が「上古」とが明らかに組になって使われている。

私はこの「先代」といい、「上古」といい、はっきりと指している時代があると思う。すなわちそれは推古朝であり、六世紀であって、七世紀から八世紀の古代人が「上古」の時代を推古天皇（在位五九二年～六二八年）までと考えたことと、そこにいたる六世紀あたりが文化の画期であったことと一致する。

もちろん、文字が使用されたからといっても、文化全体としては文字に関わらない口頭の行為や身体の行為はずっと生命を保ち続け、継続されるのだから、文字と無文字との文化の複合化がそこに生まれたということでこそあれ、世の中の文化の全体が口承から文字による記録へと動いたわけでは決してない。

さて、「上古」の時代が推定されると、安萬侶が書いた「序」の次の記述が大きな意味を持ってくる。

「上古の時は、言と意と並に朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於ては即ち難し。已に訓に因りて述べたるは、詞心に逮ばず。全く音を以て連れたるは、事の趣更に長し、是を以て、今、或るは一事の内に、全く訓を以て録しつ。即ち、辞の理の見え叵きは、注を以て明し、意の況の解り易きは、更に注せず」

「上古においては言葉もその意味もともに素朴で、どのように文字に表わしたらよいか困難なことがある。すべて訓を用いて記述すると、文字がいわんとするところに届かない場合があり、すべて音を用いて記述すると、長々しくて意味が取りにくい。そこで、今、ある場合は一句の中に音と訓とを交えて用い、ある場合は一つの事柄を記すのに、すべて訓を用いて書くこととする。そして、理解しにくい場合には注をつけて意味を明らかにし、事柄の意趣を分かりやすいのには注をつけない」

（現代語訳）

このように、既に安萬侶の時代でさえ「上古」の『帝紀』や『本辞』（『旧辞』）などはほとんどの人が読めなかったのではないだろうか。それは『古事記』を編纂する時、既に渡来していた「古来人」たちの記録は倭語ではなく、渡来系の人達の言葉によって伝承され、記録されていたためではないかと思う。

漢字が導入されても古代、朝鮮半島より渡来していた人たちの家々の伝承や記録は、すなわち三世紀から六世紀の口伝や記録は、安萬侶が撰上した八世紀前半には、既に判読するのが難しく読みにくかったのではないかと思う。たまさか渡来系の人達の中に、母国の言語に精通していた人たちだけが解読できたのではないか、奈良時代の「今来人」たちは、この国の「上古」の言葉が既に判読しにくく、難渋したのではないか、そのことが『古事記』の「序」に隠されているのではないだろうか。

「序」は四六駢儷体（中国の六朝・隋・唐の時代に流行した装飾華美な漢文体）で書かれているのに対し、本文は変体の漢文で書かれている。このことは『古事記』上巻などは、「上古」の旧辞であり、私たちが使用する日本語（大和言葉）でなく、渡来系の人たちによる言葉の表現を当時伝わった漢字に書き替えたことを示しているのではないだろうか。

そして『古事記』そのものは上代の「フルコトブミ」を写し、後代、律令ができた頃、追記したのではないかと思う。このことは、『古事記』が撰上された後に『古事記』そのものが行方不明になり、前記の『弘仁私記』に「古事記＝フルコトブミ」という書物があったと記録されていることからも推定できる。

弘仁年間は平安前期の八一〇年から八二三年までの足掛け十四年間である。太朝臣安萬侶が『古事記』を元明天皇に献上したのが七一二年、『弘仁私記』が八一二年に出来あがる。この間、百年もの間だ『古事記』は行方不明になっていた。また、国宝真福寺の『古事記』写本が一三七二年（応安五）に出来あがるまで、実に六百年もの間『古事記』は闇に眠っていたのだ。また、『古事記』が広く研究されだしたのは、江戸時代後期で、本居宣長の『古事記伝』からである。つまり『古事記』は、安萬侶が献上した七一二年から『古事記伝』の完成した一七九八年までの一〇八六年の間、人々に忘れられていた書物なのである。

本居宣長以後『古事記』について、色々解釈や校注を試みた学者は数多くいるが、本居宣長の『古事記伝』の域を越えるものはいない。

「序」を繰り返し読むほどに謎が深まっていく。『古事記』という書物は本当に不思議な史書である。

参考文献

『古事記伝』　本居宣長
『古事記序文註釈』　倉野憲司
『物語の起源』　藤井貞和

出雲・石見一泊旅行「秋の一泊旅行」に参加して

塩出基久

去る十月十一、十二日に催された当会の一泊バスツアーに参加した。参加された方々は、ご承知であるが、日程をご紹介しつつ、簡単な印象を書き添え、報告とする。

訪問地の詳細は、旅行委員の作成された「立派なパンフレット」があるので、ご一読をお勧めする。

★第一日

（神原神社古墳）

境丘の上部に神社の本殿が建立されていた「竪穴式古墳」であること、出土品に、わが国でも二例しかない「景初三年」の銘のある三角縁神獣鏡があったとの説明に、そんな昔に国家形成にからんだ勢力圏の一端を担ったであろう古代人が沢山住む集落があったのかとの想いと、古墳の建造技術（土木技術）の水準の高さに尊敬の念を抱かされた。

（古墳の丘古曽志公園）

場所は宍道湖北岸に位置する小高い丘陵上に立地し、実によく整備された古墳公園だ。中心となる、移築復元された前方後方墳は五世紀末の築造といわれている。

宍道湖が遠望でき、眺めも素晴らしい。昼食を挟んだ一時間半強の観覧では、去りがたい思いがした。家族連れで出かけられ、小中学生の子供さんがおられれば、古墳の概要の一端でも披露されれば、お父さんとしての株は急騰するだろう。

（一畑薬師・出雲大社）

この両所は、著名で多言はいるまい。自分としては、観光地化され、日に日に俗化の一途をたどっていることを憂うる。

（鰐淵寺）

この寺の建立は五九四年とのことである。当時は文字通り深山幽谷の地であったものと思考される。

しかるに、千百年代には修験道の道場として中央にも知られたとのこと、往時の繁栄に思いを馳せた。

静かなたたずまい、荘厳さは本山の比叡山延暦寺に比肩するのではないかと感じた。

運営面から言えば、道路整備をして、俗化は覚悟して、バス路線に繋なげることも必要だろう。

（小早川正平の墓）

敗者の悲哀の極みだ。

（第一日の行事完了）

宿舎「眺欄荘」からの、日本海の彼方に沈む夕日は絶景であった。夜の会食・懇親会での、田口会長の挨拶にあった「この場は、1／3は史跡探訪と勉学、1／3は会員相互の連帯感の形成、残りの1／3は、明日に向けての充電時間…」は、まさに正鵠を得た言葉であると参加して実感した。

★第二日

（大森代官所跡・石見銀山資料館、大森町並み散策、山吹城登山、龍源寺間歩の見学）

銀の採掘の大変さと、当時の最新技術の駆使による産出の様子が、よく理解できた。「山吹城跡」については、備陽史探訪七六号の平田氏の「山吹城に登る」を参照されたい。

（順庵原一号墳）

日本で最初に発見された「四隅突出型墳丘墓」。道路建設で一部分が削られているのは、誠に残念だ。

★終わりに。

まずこれだけの旅行の推進に当たられた旅行委員の皆様のご苦労にたいして深甚の感謝の意を捧げたい。

準備に当たり、一部の方々に負荷が集中するのではなく、負荷分散が今後の課題と感じた。

今一点は、我々の居住区内の史跡は、当会として破壊されないよう目を向け、維持活動にも留意するのも使命の一つと感じた。

（これは、本年初頭の会合での田口会長の言葉であり、同感なので、あえて採録した）

以上。

浮浪山鰐縁寺にて
参道が大雨で崩れ、迂回路をえんえんと歩く。
突然大伽藍が現れたときには感動した。

歩いてみよう！ 備後の遺跡

網本 善光

最近は「歩く」ことを趣味にする方が増えたと聞きます。「歩く」といっても、散歩などではなくて、それなりの距離をサッサと歩くもので、健康のためにも大変に良いのだそうです。

備陽史探訪の会でおこなう徒歩例会などにも、会員の歴史ファンはもちろん、「歩く」ことにも興味がある方が増えているようです。こうした遺跡・史跡めぐりには、「歩く」目的があるうえに、新たな発見もあることが良いのでしょう。講師でご一緒していますと、参加者の方から「今日のコースをもう一度歩いてみたい」などの声をいただくことがあります。「ぜひ何度も見にいらしてください」とお答えするのですが、遺跡、特に古墳を中心に「歩く」時のご注意やヒントなど、今回は少しお話ししてみたいと思います。

まずは、地図でおよそのコースを決めなければなりません。地図は市販の「福山市」のものでＯＫです。ちなみに私は、昭文社発行の都市マップを重宝しています。

次に、手軽な本で付近の古墳など調べる必要があります。市販の地図にはよほど有名な遺跡でない限り、その場所は載っていません。ここで力を発揮するのが、わが会の作った『探訪　福山の古墳』です。この本は、遺跡を徒歩で訪れることを目的にして作っています。

また、芸備友の会の『広島県の主要古墳』や、保育社の『日本の古代遺跡　広島』（どちらも福山市民図書館にあります）も重宝します。

ルートには、どの遺跡を入れようか迷うことがあります。ともかく、国や県、市の指定文化財を見に行きましょう。これらは案内板や現地での説明板などが整備されているので助かります。遺跡についたら、説明板を確認してください。この遺跡がいつ頃の時代のもので、どんなものが見つかっていて、どのような意義があるものなのかがわかります。

加えて、古墳を見るときの四つのポイントをご紹介します。

まずは、立地です。山の上なのか、谷筋なのか、平野部なのか。そこから見える範囲はどのあたりなのか。例えば、石鎚山古墳群のように、尾根上の眺めの良い場所に築かれた古墳は、平野を見下ろすものであると同時に、下の集落からも仰ぎ見ることのできる墓です。まさに、首長の権威の象徴にふさわしい立地といえます。

次に墳形です。円なのか、方なのか。明確な墳丘の残っていない小さな古墳もあります。最近の学説で、古墳の形はそこに葬られた者の政治的なランクを表していると考えられています。前方後円墳→前方後方墳→円墳→方墳の順に形の差があり、これと大きさとの相関関係から、その地域の歴史を読み取ろうとする研究もおこなわれています。

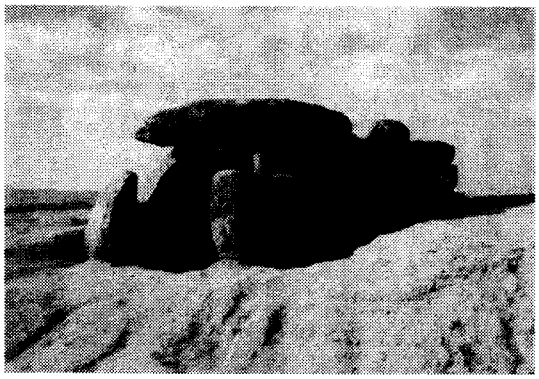
三番目に外部施設です。古墳の表面にある、具体的には葺石・周溝・埴輪のことです。

指定文化財のように整備されているものはともかく、草むらに埋もれている古墳の表面を観察することは意外と難しいのですが、これからの季節、下草を払ってみてください。運の良い場合には埴輪を見つけることができます（ただし、掘ったりするのは絶対にダメです）。

最後に、埋葬施設です。古墳の埋葬施設に、竪穴式と横穴式があるのはよくご存じだと思います。もう一歩進んで、使っている石に注目してみてください。平べったい割石を使っているもの、角の丸いままの岩を使っているもの、切石のものなどさまざまです。また、箱式石棺という板石状の石材を利用している古墳も多いのです。

古墳時代は四百年あまり続くわけですから、当然に古墳の内容にも変化があります。それら変化を読み取ることができれば、自分なりの歴史像を描くことも可能です。発掘調査というのは、いわば古墳を外科手術によって読み取るやり方です。これに対して、古墳めぐりは、立地・墳形など、掘らずに読み取る、いわば内科的なやり方です。

遺跡・古墳めぐりにはこれからが絶好の季節です。楽しみながら、そして少し勉強しながら「歩く」のはいかがでしょうか。



狼塚２号古墳（駅家町法成寺）

悲運…崇徳上皇と真言宗阿弥陀山医王寺

柿本 光明

福山の蔵王山麓にある真言宗大覚寺派阿弥陀山医王寺は、人皇七五代崇徳天皇が大治二年（一一二七）丁未、西国に行幸されたとき天皇、現当二世大願成就のため、勅使を以て勝地を見立て、この阿弥陀ヶ峯（蔵王山の一峯）に草創されたのが始まりで、行基作のご本尊の薬師如来と阿弥陀仏があり、当時はかなりの僧兵もいたと思われる。

天文三年（一五三三）の戦乱で、この堂宇は無惨にも焼失したが、山麓の現在地に移転再建された。しかし、江戸時代の末期に再度火災にあい、鐘楼以外は焼失、現在の建物はその後再建されたものである。

この真言宗阿弥陀山医王寺と崇徳上皇とは、勅願により創建されたことなど、昔から深い関係がある。

私は今、香川県坂出市青梅町の白峰山中に立っている……。西国八十二番のこの白峰寺は、崇徳上皇の頓証寺として、建久二年（一一九一）に建てられたものである。寺の脇には崇徳上皇の御陵がある。

坂出市から車で二〇分ほど、曲がりくねった坂道を登りつめた山頂付近の鬱蒼と繁る森の中に白峰御陵の清楚な姿が見える。

崇徳上皇は、歌人としても知られている。小倉百人一首に

「瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ」

という歌がある。

保元の乱で敗れた後、上皇は讃岐に流され、およそ九年後にこの地で亡くなった。四十五歳のときである。遺体は白峰山で荼毘に付されたが、その煙は怨むがごとく都の方角にたなびいたと伝えられる。

ふと気がつくと、いつ来ていたのか住職が側に立っていた。

「あなたにはわかってもらえると思いますので」と古びた一通の文書を手渡してくれた。次の文章がその大略である。

夫敷島の道、妹背の中の詠歌を以て国の風俗みやひとなれり。是や色の重きを以てならん。此重き道を以て軽く行はるる故に、国乱れ家傾き王道廃せり。保元の乱れ色に起れり。

そは人皇七十四代鳥羽院と申奉るは堀河院第一の皇子にて座しが、堀河院世を早うし給ふゆへ鳥羽院御歳五歳にて御即位あり。其妃侍賢門院璋子は、堀河院の御父帝白河院の御猶子として入内あり。鳥羽帝御幼年なりしかば暫く御雙枕なき内、密通し給ひ、既に御身籠りのわけみえて、御幼年なから御配偶ありて後、御誕生ましまします。是崇徳天皇にておはします。鳥羽院も是をしろしめし、崇徳天皇は御子なからも叔父子叔父子とぞ宣ひしとぞ。此故に鳥羽白河の御中御快よからさりしが、白河院の御計らひにて鳥羽院御歳二十一にして御位を崇徳院へ譲らしめ給ふ。斯て白河院崩し給ひしかは、鳥羽院の御計らひにて崇徳院の御位を下り、程なく御子第八の宮、御歳三歳にならせ給ふ體仁親王（近衛の帝）に即位せしめ給ふなり。

偖近衛天皇御年十七歳にて、久寿二年七月十六日崩し給ふにそ。崇徳天皇御重祚と沙汰有へき處、鳥羽帝第四の皇子、雅仁親王、御位に備り給ひ、御白河天皇と申す。斯、御位の打替りぬるを以て、世には崇徳天皇の呪咀し給ふとそ沙汰しける。かかる事より崇徳天皇の御恨み一入に増り給ふ處に、久寿三年七月二日鳥羽帝崩しさせ給ひしかは、崇徳天皇、左大臣頼長と謀りて、重祚か又御子重仁親王を御位に即け奉らんと思召て、御白河帝を襲ひ傾けんと、国々へ勅宣を下され、軍士を召催し給ふ。

此乱れ開闢以来、我国にためしなき君臣上下父子兄弟立別れ御諍ひとなり、王道の綱紀乱れ、下上を軽んじ、子父を疎んずる世となりて、国初より数千万年万国に勝れて、皇統改替なき王道衰へし崩しは、重き色をもつて軽く行ひ給ひしより發り、次には国政軽く棄させ給ふ事、唯白河の水の泡とそなし給ふ。是等の古語の伝へには、鄙俗の語に、親十八に子六十と云へるを思い合すれば、白河帝は新院の御為には曽祖帝にてましませば、鳥羽帝の御為には祖帝なり。祖帝の胤を御子とし給へば、誠に親十八子六十のたとへも、此に思はるる。実に恐るべきは色なりけり。重んせすんばあるべからず。

此に宇治左大臣頼長公は知足院禪閤殿下忠実公の三男にて、和漢の才人、御舎兄関白通忠公にも劣らぬ才人にてましませども、忠実公の御計ひにて、頼長公を内覧の宣旨あり。故に通忠公、唯、関白の名のみなり。故に御兄弟の中、是又不快なれば、是親子兄弟立別れ給へりき。左大臣も今一院隠れ給ひければ、新院の一の宮重仁親王を位に即け奉り、天下を我儘に行はやと思召、新院へ参られければ、新院仰せられけるは、

「朕、先帝の太子と生れ、万乗の尊位に備りき、然るを一旦の寵によつて累代の正統を差置かれ、不慮に蠹害になられ、父子倶に沈倫の憂を抱けり。仙院御存生の間は愁欝深しと云へとも其訴る處なし。今におゐては志を忍ぶに堪へず。斉明、称徳の跡を追うて再ひ帝位に備はるか、又位を重仁親王に授けて政務に臨んか、此時に当つて世を争う事、豈神慮に背き人望に背ん哉。此事如何」

とありければ、左大臣殿、

「天の与ふる所を取らざれば卻て其咎を受く、時の至るを行はざれば卻て其禍を受くと云へり。旧院崩御御なりぬれば時の至る事をしる。此時如何なる事をも思召立せ給はずは、いつをか斯しまし斯しまし侍ふへき」　然るべきよし申されければ、子細に及はず御謀叛の事、思召定られける。内裡にも此由聞こえければ、同しき五日参る人々には、下野守義朝、陸奥判官義康、安芸判官基盛、周防判官季実、隠岐判官維繁、平判官実俊、新藤判官助経等、高松殿に参りてけり。斯て中納言入道信西を以て彼趣意を仰られ、関々を固むべき由被仰下。

義朝、義康は内裡に候し、其外の者共は皆諸所へ馳向ふ。基盛は宇治路へ向ひけるが、大和源氏宇野七郎親治三十余騎にて院参す。基盛相向つて支へ留む。宇野七郎打破つて通らんとすれども小勢にて叶はす、終に生捕られぬ。

基盛斯と奏しければ、頓て正五位下に叙せらる。斯て十一日には新院田中殿より白河殿へ移らせられ、六條判官為義を召さる。為義辞し申しけれ共、再応に及んで子息四郎左衛門頼賢、掃部介頼仲、加茂六郎為宗、七郎為成、鎮西八郎為朝、源九郎為仲、已上六人の子供倶して参りける。

其外、左大臣頼長公、左京太夫教長卿、近江中将成雅、四位少納言成高、山城前司頼資、美濃前司保成、備後権守俊通、皇后宮権太夫師光、右馬権頭実清、式部太輔成憲、蔵人太夫経憲（中略）此外兵庫頭頼政に相従ふ兵には渡辺省播磨次郎、授薩摩兵衛、続源太、与右馬允、競瀧口、丁七唱等、都合二百余騎、佐渡民部大輔重成、百余騎。陸奥新判官義康百騎。出羽判官光信百騎。周防季実五十騎。隠岐判官惟重百騎。平判官実俊七十騎。新藤判官助経五十騎。和泉左衛門尉信兼八十騎。其勢都合四千五百余騎なり。

新院の御方には為義を召て御相談ある。為義は此御所を出て南都に越へ、若叶はすんば東国へ趣んと云ふ。左大臣殿聞給はず。内裡には義朝が謀にて夜討を議しける。白河殿には鎮西八郎為朝すすんで夜討を勧む。是又左大臣殿聞き給はず。ひかへ居ける處に、官軍数千騎、寅の刻より押寄ける。

重盛先陣に進む。為朝此を破る。義朝も押寄せ、しばしば戦ひけれども、為朝一人を破る事は克はず。故に義朝西に廻って藤中納言家成卿の宅に火をかけたり。折節西風烈しく猛火夥敷、院の御所へ吹掛けれは、院中大きに騒き立、為朝の大矢も甲斐なく、諸勢散々に成りければ、新院は御馬に乗り給ふを、四位の少将後に乗て抱き奉り、北白河へと落給ふ。左大臣殿は流れ矢に当り給ふを、落行道の小家へ入れ奉り療治しけれとも終に叶はず薨し給ふ。新院は馬にたまらせ給はず、歩行にて諸臣御腰をおし奉りけれとも、ふみならはせ給はぬ道なれば脳（悩）ませ給ふ事甚しく、漸く如意山に入らせ給ひ、是迄従ひ奉りし輩に御暇を給はりければ、諸士皆命は君に奉りしものを、何国迄も従ひ奉るべしと申しけれ共、強て御暇を賜はりけれは、諸勢はちりちりになりにけり。

夫より新院は如意山にて御出家ありて、御室を頼み参らせて入らせ給へば、御門主より寛遍法務に入れ奉り、此由を内裡へ奏聞有りければ、佐渡式部太輔重成を遣はされて守護せしめ給ふ。新院御心憂さの余り、斯こそ思ひ続せ給ひける。

思ひきや、身を浮雲と、なしはて、あらしの風に、まかすへしとは。

うき事の、まとろむほとは、忘られて。さむれは夢の、ここち社すれ。

偖も新院の御方人は或は出家し降参しけれは、武士共は悉く誅せらる。殿上人は所々へ流されて、新院は讃岐へとぞ聞えける。同しき七月二十二日、蔵人左弁資長、綸言を奉て仁和寺へ参り、明る二十三日新院を讃岐の国に遷し奉るへきよしを奏聞す。

新院日来より如何なるへき身の有様やらんと思召けれとも、出家しけるうへは、さしも罪深かるへきとも思ぼさず、都近き山里にこそ押籠められぬらむと思召しけるに、遥々と八重の潮路をかきわけて、船路の波に御袖を浸させ給はん事、御心細く思召しける余りに、斯こそ口つさみ給ひける。

都には、今宵はかりぞ、住の江の、きしみちおりぬ、いかでつみ見ん。

新院の一の宮重仁親王も出家して

嵯峨に御座す由聞召、何處にても逢ひ参らせ度思召せども叶はず。明れば二十三日夜深きに仁和寺を出させ給ひ、美濃前司保成が車に召さる。佐渡式部大輔重成が郎等共、御車をさし寄せて、先、女房達三人を乗せて、其後仙院召されけれは、女房達声を調（揃）へて泣悲み給ふ。軍兵上下三百人にて車の前後を囲み往く。夜もほのほのと明け行けは、鳥羽殿を過きさせ給ふとて重成を召され、

「田中殿へ参りて故院の御墓所を拝み、今を限りの御暇乞を申さんと思ふはいかに」

と仰下されば、重成畏つて

「安き御事にて侍へ共、宣旨の刻限移り候ひなば、後勘如何」

と恐れ申ければ

「成程汝か痛み申すも理りなり。さらは安楽寿院の方へ御車向けよ」

と仰せられければ。則ち牛を外しつつ其方へ押向け奉れば、唯御涙にむせび給ふより外はなし。

暫くあつて鳥羽の南門へ遣り出す。讃岐国司の奉行、御船並武士両三人を設ふけて、草津にて御船に載せ奉る。

「重成も讃岐迄御供可申」

と仰せられ共、固く辞し申て御暇を給はり帰りにけり。

新院も御心細く思召、重成に仰せ下さるるは、光弘法師に必す讃州まで参るへきよし御言伝あり。光弘は去る十七日の夜斬られけり。御存じなき故と思ひしかど、畏入候由御請申けり。

扨、御船に召され、後、四方に板打付け、外より鎖をさす。供御など進らすより外は輙く開く事なし。是を見奉る者は申に及ばず、怪しの賤の女、猛き武士迄も袖を絞らぬはなかりけり。

道すがらも墓々敷御膳も参らせず、打解て御寝もならず、御歎きに沈み給へば、御命も保たせ給ふとも覚えず、月日の光りも御覧せぬ。唯烈しき風、暴き波音計り御耳の底に留りける。急がぬ日数を積るにも、都の遠ざかり行程を思召せられて、一の宮御行衛も如何あらんと覚束なく、又合戦の日、白河殿、烟の中より迷ひ出し女房達も、何国にありとも聞し召さず、唯生を隔てたるも是ならめと思召つつけ給ひ、先世の宿業こそ墓なけれと悲み給ふ。

漸く讃岐に着給ひしかども、国司いまだ御所を造り出さされは、当国の在庁散位高季といふ者の造りたる一宇の堂、松山と云ふ處に有しを御所とし、是へ入れ奉りて厳敷番をぞ勤めける。

扨新院は八月十日御下着のよし国主より御請文到来す。暫く松山に御座ありけるが、当国志渡の浦、真嶋（直島である）といふ處に御所を作り、陸路より押渡る所二町計にして、田畑もなければ土民の住家もなし。実に興遠き處なり。方一町にたらず、築地を築き、中に家一ツ、門一ツを建て、外より鎖をさし、供御参らする外は人の出入有へからす。

仰せ出さるることあらは、守護の兵士承つて目代に披露せよとそ仰下さる。左あらでだに、ならはぬ鄙の御住居は悲しきに、是は又極罪人の獄窟に斉しき所なれは、御涙より外は夢もなし。定て亡郷の鬼とならんと思召、偏に後世の御為とて、五部の大乗経を三年が程に、御自筆に遊はし、遠国に捨置ん事も不便に候。御免候者、都のほとりに納め度よし。御室法親王へ憑み遣はされ、奥に一首の御製あり。

浜千鳥、跡は都に、かよへとも、
身は松山に、音をのみぞ啼。

御室の御所、御涙を流させ給ひ、関白殿へ様々執し申させ給ひしか共、信西、御身は配所に留め給ひ。御手跡計り都に還入し給はん事、忌々鋪覚え候。其上如何なる御願にて侍らはん。覚束なしと申ければ、主上御許されなかりける間、力及はせ給はず。新院是を聞召、

「口惜き事哉、我朝に限らず、天竺、震旦国に至る迄、位を争ひ国を望みて兄弟合戦を致し、叔父姪乱を起すためし、昔も今もならひある事なれとも、時移り事去つて罪を謝し咎を宥めらるるは王道の恵みなり。況んや出家入道して菩提の為に仏経を読誦するは、皆許されてこそありしが、後世の為にとて書写し奉たる経の置所だに、をしませらるる事、扨は後世迄の敵ぞかし。然は我生て無益なり」

とて、其後は御髪をも召されず、御爪をもはやさせ給ひて生ながら大天狗の姿にならせ給ふぞ浅ましき。

此事都へ聞えしかば、御有様見て参れとて、平左衛門尉康頼下し遣はさるる。康頼、嶋に渡り、御使いとして参りたるよし奏し申しければ、近く参れと仰せらるる。康頼、障子を明て見参奉れば、御髪、御爪永々としてすけ（すすけ）かへりたる柿の御衣に、御顔の色も黄ばみ、御目も窪く痩衰へ給ひて、荒けなき御声にて、

「我違勅の罪によつて譴る事（る事二字愆か）遁ひ難くして、既に大罪の法に伏す。然りと雖も、今においては恩謝を蒙るへきよし強て申と云

へども、敢て御許容なき間、志の忍ひ難き余り、不慮の行を企る」

との勅定なり。

康頼承りて身の毛もよたつて、すさましかりければ、一言の勅答も申得ず、急き退出してけり。新院御書写の経の事畢りしかは、御前に積み置せ給ひ、御祈祷ありけるは

「我大罪に行はれ愁欝浅からす。速に此功力を以て彼咎を救はんと思ふ。莫大の行業を三悪道投込、其力を以て日本国の大魔縁となり、王を取て民となし、民を王となさん」

とて、御舌の先を噛み切り、血を以て大乗経の奥に御誓状を書付給ふて、海岸に出御ありて、

「願くは上梵天帝釈、下堅牢地神に至る迄、此誓約に合力し給へ」

とて海底に沈め給ふ。

斯て九年を経て、長寛二年八月二十六日、御年四十六歳にて真（直）嶋の御所にて崩御ならせ給ひけり。

扨、白峯と申す處にて烟となし奉る。其烟りは都の方へなひきける。彼の一の宮は御出家あつて後、花蔵院法親王空雄と申す。

新院崩御の事、都へ聞えしかば、御服奉られけれ。法親王御涙を押て。

うきなから、其松山の、形見には、今宵そ藤の、衣そきる。

梶山古墳探訪記

平田　恵彦

鳥取県国府町にある装飾古墳、梶山古墳の石室が一一月一六日、一般公開されるというので行ってきた。この日は瀬戸町徒歩例会の当日だったが、次の公開は二年後ということなので行かせてもらうことにした。

ルートは山陽自動車道から、開通して日の浅い岡山自動車道をへて、国道三一三号を通ってまずは倉吉へというもの。以前この道は錦ちゃんや矢野さんと行ったことがあるのでよく知っている。あの時は一泊だったが、今回は日帰りである。一緒にと誘った三人はまったく初めてということなので、いきおい僕がガイド役ということになった。

高速道路を降りて最初に寄ったのは四ツ塚古墳群（岡山県八束村）である。蒜山高原のただ中にある古墳群で、全部で一六の古墳からなる。名称の「四ツ塚」はこのうちの国史跡に指定された四基からつけられた。以前来たときは夏だったので、花咲き乱れ、草萌ゆる楽園だったが、いまは晩秋、火山灰土の黒土だけが目立つ寒々とした光景が広がっていた。それでも整備された広々とした古墳公園は見事で、どこに出しても恥ずかしくない。春訪れれば美しい花たちの競演がきっと見られるだろう。

一号古墳は直径約二四ｍの円墳で、横穴式の石室をもつ。大正時代にすでに発掘調査され、馬具等の出土遺物は東京国立博物館に保管されているというから立派なものだ。

ここから中国山地を越えて鳥取県へひた走る。以前は急峻な犬挟峠が難所だったが、最近、大トンネルと新道が開通したので楽々である。

次の探訪地は天神川の谷間の集落倉吉市広瀬。ここの石造物が変わっている。田の畔に立つ「広瀬の層塔」と呼ばれる七重塔は、元は十三重塔だったらしいが、塔身や笠のあちこちに他に見られない独創性があり、広瀬型式といってもよいほどのものである。また、少し離れた山中にある一石彫成五輪塔も非常に珍しく、僕は初めて見た。文字通り、ひとつの石から彫り出された五輪塔で、よく見受けられるような便化されたものではない。平安後期の作らしく全国的にも最古級のものだそうだ。

これだけでなく、そこちに多くの石造物が見られ、広瀬は「石塔の宝庫」といってもよさそうである。外にも広瀬廃寺（『拾遺往生伝』に見える伯耆弘瀬寺の跡らしい）、広瀬神社を見て伯耆国分寺跡（現国分寺と一km近く離れている）へ向かう。

ここは発掘調査されており、伽藍の配置が判明している。いまは基壇だけが復元されて堂宇はない。

このあと阿弥大寺古墳群へ行く。有名な四隅突出型墳丘墓群だが、国の史跡をとるため「古墳群」になっている。残念ながら、いまは埋め戻されており、直接見ることはできなかった。ただ、隣が畑で、そこで農作業をしていた方が発掘の様子の話して下さった。また、隣接した小山には国司氏の高城城跡があって、多くの曲輪や立派な空堀が残っているとのこと。おまけに帰りには「みやげだ。持ってけ」と大玉のキャベツを一人に一個ずつ下さり、みんな大喜びした。

倉吉市立博物館は山名氏の居城として知られる打吹山城の東麓にあり、歴史・民俗・美術のどの分野も展示している。僕らが行ったときはちょうど特別美術展の開催初日で、セレモニーの真っ最中。サービスで無料入館できたのはついていた。さっそく考古資料室で先ほどの阿弥大寺古墳群の出土遺物を確認する。パネル写真もあり、北側の突出部が破壊されて残っていなかったことなどがよくわかった。

学芸員にこの前週に現地説明会が実施された大御堂廃寺（倉吉市駄経寺町）の場所を聞いたが、もう埋め戻したという。行ってみると、ちょうど市営ラグビー場の南に隣接していて、まだ埋め戻されていなかった。こうした経験は何度もある。大阪府の近つ飛鳥博物館で、発掘後間もないダスダン古墳が見学できると聞き、飛んで行ってみれば、埋め戻された後だった。たとえ学芸員のいうことでも鵜呑みにしてはいけないのだ。

現地でよく見ると、土器類が表出したトレンチがそのままあったので（もっとも見学用かも）、調査は継続しているようだ。実は、墨書土器など、ここからの出土遺物が一二月一日から文化庁主催の「97新発見考古展」に出展される。岡山県立博物館にはぜひ行こうと思っている。

三明寺古墳は伯耆守護山名時氏の香華寺、大雄山光孝寺の跡、現山名寺（倉吉市三明寺東）の裏山にある。古墳の横には山名時氏の墓と伝えられる宝篋印塔がある。確かに年期は入っているし、作りも立派なのでそれなりの人物の墓であることは間違いない。しかし、守護は在京なので、時氏の墓はマユツバだろう。

この三明寺古墳は径一八m、高さ六mの円墳で、切石に近い巨岩で構築された横穴式石室をもっており、六世紀末の築造という。僕が見た限りこの古墳の特徴は三つある。

まず、玄室に大きな観音開き（ただし実際には開閉しない）状の二枚の扉石（中央に空きがある）があること、次に玄室が正面から見て横長の長方形で、羨道が極端に短いこと、そして、羨道側面の積石が巨大な偏平石であることだ。いずれも他の地域（少なくとも備後）ではあまり見られない形式である。

この特徴は、次に行った波波伎神社境内にある福庭古墳にも（羨道部の偏平石を除いては）当てはまる。この古墳の石室になると、横口式石槨に限りなく近づいている。実際、案内板にも築造時期は七世紀前半とあった。いわゆる終末期古墳だが、備後とは対照的に畿内の形式とは異なった地域性の強い石室のように思う。波波伎神社の社叢は国の天然記念物に指定されているほど、シイノキなどの照葉樹林が豊かなのだが、時間がなくて散策は省略し、次の目的地に向かってクルマを走らせた。

三明寺古墳
石室内部は箱式石棺が残る

朝食は伯耆国分寺でTさんからいただいたサンドイッチ一個だけだったので、さすがにお腹が空いてきた。そこで、道中コンビニを見つけて弁当を買って食べることにした。昼食の場所は倉吉市の北隣、羽合町の馬の山山頂にあるハワイ風土記館公園である。ここからの眺めは日本海や東郷湖をすべて見渡せる三六〇度、絶景である。周辺には二十数基で構成される橋津古墳群の古墳が点在し、風土記館からもよく見える。

そのうちの馬の山四号古墳は、全長一一〇mの鳥取県最大の前方後円墳で、四世紀の前期古墳である。埋葬施設は東西方向に主軸をとった竪穴式石室で、内部には朱が敷きつめられた上に舟形木棺があった。また、東頭位と推定できる人骨があり、被葬者は女性と考えられている。副葬品は三角縁神獣鏡一面のほか七面の銅鏡、ヒスイ製の勾玉、石釧、車輪石の他、工具類や刀剣等もあり、質量ともに山陰随一といってよい。

その次に、同じく羽合町にある、考古学の常識を覆したという長瀬高浜遺跡に寄る予定だったが、梶山古墳の見学受付時間（三時半まで）の関係で省略することにした。

羽合町から国道九号線を一時間弱東上すると、鳥取市内に入る。さすがに県庁所在地だけあって道路は混んでいる。国道を迂回し、鳥取城の直下を走って市内を通り抜ければ、いよいよ国府町である。この町はその名の通り、因幡の国府があったところである。

天平宝字二年（七五八）因幡守として赴任した大伴家持が、その翌年この場所で『万葉集』四五一六首の掉尾を飾る歌、すなわち

「新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事」

を詠んだのは余りにも有名である。

因幡国府跡は史跡公園として整備されているが、周りはほとんど田圃である。この部分だけは当時とあまり変わっていないかも知れない。近くには数年前「因幡万葉歴史館」と

いう施設ができて観光客を集めている。純粋な歴史資料館というよりは、やや一般向けにつくられたイベント館といった趣だが、それはそれでいいと思う。今回は時間がなく、寄ることができなかった。とにかく国府町には名所旧跡が多い。

例えば、法美平野最古の糸谷墳墓群（四隅突出型墳丘墓）、謎の石造物の岡益の石堂（陵墓参考地）、銅製骨蔵器を出土した伊福吉部徳足比売の墓、因幡一宮の宇倍神社、国重文の薬師三尊像をもつ学業院、巨大な心礎の残る栃本廃寺跡（国史跡）、日蓮を生涯外護した富木常忍の所領だった度木郷に築かれた山崎城、池田家（鳥取藩主）墓所などがある。

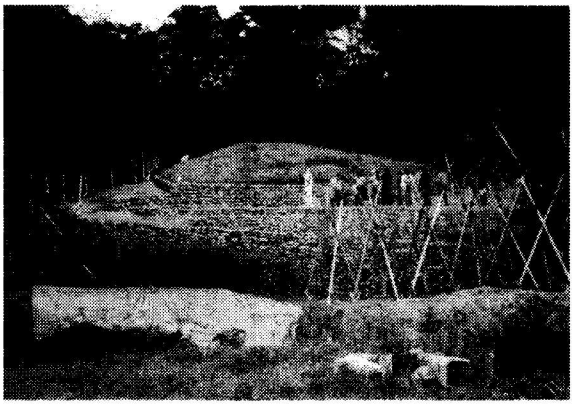
このように数ある遺跡の中でも、最も光るのが今回石室が公開される梶山古墳だろう。この古墳の特色は大きく分けて二つある。

第一に、墳丘が八角形であること。

一般に、八角形墳は王者の墓といわれている。舒明陵（段ノ塚古墳）、天智陵（御廟野古墳）、天武・持統合葬陵（野口王墓）、文武陵（中尾山古墳）などいずれも八角形である。そんな中、梶山古墳も八角形なのだから、皇族かそれに準ずる人物が葬られているという説がある。一方、鳥取県立博物館の田中弘道さんは伊福吉部臣古志の一族、都牟自臣という説を出しているらしい。

次に、石室に壁画がある（こういう古墳を装飾古墳という）ということだ。今回はこれを見に来たようなものである。

壁画は主に赤色顔料で正面の壁に描かれている。ライトモチーフは明らかに「魚」（鮭説と鯉説あり）で、中央に配置されている。その上に同心円文（僕は辟邪の目と思っている）が左右に各一個、三角文（僕は鱗と思っている）がその外側に各一個、そして同心円文の間には曲線文（僕は蛇と思っている）が一本ある。



梶山古墳
変形八角形墳、対角長一七ｍ

魚をモチーフにした壁画古墳は、他にも鷺山古墳（国府町）、空山一五号古墳（鳥取市）、土下二二九号古墳（北条町）などがあり（ただし、いずれも線刻画）、これは地域性の現れかも知れない。

「八角形」の畿内性と「魚」の地域性、これらを総合してこの古墳の持つ意味を考える必要があるだろう。これは新市町の尾市古墳の問題にも関わってくることなので、軽々には結論を出すことはできない。これを機会にじっくりと考えてみたい。

石室の見学時間はわずかに二分。それでもレーザー光線の照射された壁画は怪しく輝き、センスオブワーダーを感じるのに十分だった。

その後、隣接する岡益の石堂を見学し、線刻画を見るために鷺山古墳へ。山路へ入ったはいいが、スリップして出られなくなり立ち往生。あたりは暗くなり始め、不安が頂点に達したその時、近くでナシ園を経営なさっている西尾さんに助けていただいた。その上、これまた大きなナシのおみやげまで持たせて下さった。

今度の旅行では、多くの方々の親切が身に染みた。いい旅ができたのはこの方々おかげだと思っている。

お詫びと訂正

前号三ページの藤井節子さんの短歌に重大な誤り、すなわち『神庭岩船古墳を訪ねて』は「行変えミス」、『山城二子塚古墳を訪ねて』は「句の抜け」と「行変えミス」がありました。藤井さんには、この場を借りて深くお詫びいたします。

『山城二子塚古墳を訪ねて』は正しくは以下の通りです。

山代二子塚古墳を訪ねて

藤井　節子

二子塚古墳の遺霊足下に
踏むに畏しき芝原に立つ
二子塚古墳に眠る人や誰
草いきれする風をきこうよ

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため
掲載できません。

金毘羅・由加山両参りの記

門田 幸男

女房殿が学校時代の友達と二泊三日の旅行をするというので、これはチャンスとばかり、一度は行きたいと前から思っていた金毘羅例大祭にお参りすることにした。

だが、祭まで数日しかないので、混雑する祭当夜の宿の予約はおそらく難しい。それじゃ車で行って車で仮眠するとか、終日運行している宇高連絡フェリー（瀬戸大橋は通行料が高い）で帰ればよしとして、十月十日十二時二十分、福山港発の多度津フェリーに乗った。宇高フェリーに比べれば二千円くらい高いが、多度津に着けば金毘羅山はすぐなので利用することにした。それに、明るいうちに着かないと駐車場探しも骨が折れるし、あちこち回って見るためにも早く着く必要がある。

まず、北神苑を訪れる。海岸から十キロ以上離れているのに海上安全の守護神としての役目だろう、高い灯籠が立っていた。次に南神苑に回る。有名な屋根の着いた鞘橋を見て苑内に入ると、神社関係者や多数の参拝者が右往左往してごった返している。ここはお旅所でもあるので、仮説の神殿や祭壇やお頭人様（男女それぞれの幼児がなる）の御座所などが設営されていた。

昔の神祭は、ふつう祭の直前に仮屋を建て、祭が終わると即座に分解したり焼いたりしたものだそうだ。今でも大嘗祭の祭屋がそうで、造営から解却まで五日間しか存在しない。また以前、春日神社若宮の「おん祭」のお旅所も見たが、松の丸太の柱に松葉を使った屋根や壁だった。

そこで、なぜ仮設だったのかを考えてみると、おそらく神様に長居をされると、人間の側に何かの粗相があって祟られる事を恐れたからではなかろうか。蘇民将来の伝説を例にとっても、武塔天神は訪れる神（客人神）であるし、同時に祟る神だということになっている。

余断はさておき、いよいよかの有名な金毘羅山の石段である。狭い石段を上る人、下りる人、立ち止まる人で混み合ってなかなか進まない。だが、老境に入った現在は、この程度のゆっくり上りがかえってよいのかも知れない。店並みが終わると、次は百万、二百万と多額の寄付をした人の名前の刻んだ石柱が数えきれないほど並んでいる。金毘羅信仰の凄さを実感する光景だ。

さて、山の上から眺めると、南神苑が右側に、北神苑が左側になるから、御神輿は東に向かって移動し、南神苑に着くことになる。

この意味を陰陽思想で解いてみると、東も南も「陽」だから、十月十日、つまり「亥の月の亥の日」という祭の日の「陰」の気を打ち消す方向に御神輿は移動しているわけである。この推理を補充するのが「お頭人」の存在だ。

幼児の「男お頭人」は易でいうところの「小男の艮」である。艮の位置は即ち丑寅の方角（北東）で、時間にとれば、冬の終わり・年の終わりの「丑」と、春の始め・年の始めの「寅」の性格とを併せ持つ。それで、継ぎ目とか変化を表わす性格をもっている。だからこれは「亥の月の亥の日」の祭礼に姿を現し、信者の願う明るい「陽」の気配に切り換えて下さるのを期待する呪術だろう。

一方「女お頭人」の働きは何かと考えてみると、これも幼女なので、易でいう「小女の兌」にあたる。これは自然界では、沢（海や川のようには動くことのない水）を表わしている。四国（特に讃岐）ではたびたび起こる旱魃、つまり、生きもの全ての命を支える水が途切れることを防いでもらおうという願いが込められているのではないだろうか。

さらに「男お頭人」は自然界でみると「山」にあたる。この「動かない」という性格で、海上が波立ち騒ぐのを押さえようという願いを担っていると思われる。神は姿も見えず、声も聞くことができない。それで、祭神の性格を知る手がかりになるのが、この男女両「お頭人様」の存在だと私は考えている。

ところで「兌」の方角は西にあたるので、麓の住民から見れば、金毘羅山そのものの場所である。また、「兌」の字形（人が大きく口を開いて笑っている形）のもっている意味即ち「喜び」も、金毘羅様の威力で潤沢に水が得られたときの人々の心の様子を表わしている。金毘羅山背後の讃岐山地を打ち抜いて香川用水のトンネルが掘られたのもきっと何かの因縁だろう。

さて、山上の本殿での神事や舞の奉納は午後四時からなのでじっくり拝見できが、御神輿の渡御は午後九時なので、それまでには気の遠くなるような長い時間がある。七百余りの石段を上って疲れたので、下りて休むことにして下りかかると、上るときは混んでいて見えなかった金毘羅犬の像に逢った。石段を上れない主人の願いを受けて代参したという奇特な犬である。犬ではないが、

沖を通る船から投げられた奉納物の樽を海岸の人が拾ってわざわざ届けたという話もある。このように金毘羅信仰の重みを感じさせるエピソードはたくさんある。

山を下りてはみたが、足腰を伸ばして休む場所がない。「お頭人様」を拝みたい気持ちはあっても待つ身はつらい。せっかく祭礼の日に来たのだが、御神幸を拝むのはまたの機会にして、同じく市内に「琴」の地名をもつ観音寺に向けて琴平を後にした。

観音寺の琴弾公園の名称は、武内宿禰が琴（古代では、神の降臨を導く特別な楽器とされた）を弾き、息長帯比売（神功皇后）が託宣したという伝説からきたものだろう。山上にはもちろん琴弾八幡神社がある。一方、金毘羅山の名前は、インドの水神クンピーラからきたといわれているが、現在は大物主命が主祭神となっている。この神も『古事記』によれば「海を光らして依り来」たとされているので、やはり海と深く関わっている。

琴弾公園に着いたら日が暮れてしまった。終日運行のフェリーに乗る手もあるが、せっかく四国にまで来たのだから、柿本人麻呂ゆかりの沙弥島にも寄ってみたい。それで琴弾八幡の境内で仮眠させてもらうことにした。

夜明けとともに八幡様に参拝し、琴弾公園を散歩して根上り松の写真を撮ってから沙弥島に向かった。女房殿が強く勧めた万象園の前を通ったが、まだ開門していない。それでそのまま走って沙弥島に着いたのが九時だった。しかし、頭上には瀬戸大橋がそびえ立ち、電車が轟音を響かせて通るので、流人の死体が横たわっていた雰囲気のカケラも感じることはできなかった。時代の変わり方が激しすぎる気がする。人麻呂終焉の地、益田にもいつか行ってみたいと思っているが、さて、どんな様子になっていることだろう。

明治以前は、金毘羅参りと由加参りとは「両参り」といい、セットになっていたと聞いているので、宇野に上陸したら迷わず由加山（由加神社・蓮台寺）へ向かった。那智山もそうだが、由加山も、次に参った熊野神社・五流尊瀧院（倉敷市林）も、神道と仏教、または修験道とが混淆していた時代の風景が数多く残っている。私は、同じ神霊でも、前から見れば、神に見え、後から見れば、仏の姿に映り、横から見れば、権現と現れると感得しているが、皆さんはどう理解しておられるだろうか。

『中世を読む』発刊！

体裁　B五判　本文七二頁
会員頒布価格　一〇〇〇円
一般頒布価格　一五〇〇円

待望の久しい城郭研究部会の機関誌『中世を読む』第五・六合併号がこの九月下旬上梓されました。二年ぶりの発刊ですが、満を持して十分準備をとっただけあってすばらしい論文が集まりました。

田口会長の『備後の応仁の乱』は、備後における大乱の勃発から収束までを、山名宗全・是豊親子の相克による備後の国人衆の分裂とこれに伴う争乱を通して概観し、その歴史的意義を考察したものです。

また、次にあげた各氏の論文もいずれも秀作ぞろいです。今後、会の諸行事で販売していきますのでぜひご購入下さい。

▼「―宮氏研究ノート―南北朝期の宮氏」　木下和司
▼「備後国安那郡勝田本庄の粟根氏と杉原盛重」　小林定市
▼「芦田郡金丸村の古城主を通して見る備後古城記の生い立ち」　小林浩二
▼「山内首藤家応仁・文明年譜～国人領主への道～」　出内博都

『倭城の研究』発刊！

体裁　B五判　本文一四八頁
図版　白黒・カラー　一四頁
頒布価格　二五〇〇円（郵送料込）

本田昇先生はじめとする多くの著名な山城研究者が所属する「城郭談話会」が、この秋、豊臣秀吉の築城遺跡『倭城の研究』（特集　巨済島の倭城）を出版しました。希望者は以下の要項に従って購入して下さい。申し込みは郵便振替口座

○一一二〇　一　二七四二〇
（名義）城郭談話会

問い合わせ　角田誠さん（事務局）
〒六六四　伊丹市伊丹三　八　五
☎〇七二七―七〇　一三九四

『古事記』を読む

【実施要項】

日程　一二月二〇日（土）
一月一七日（土）

★ともに第三土曜日に変更します。

時間　午後二時から。
場所　中央公民館会議室
講師　神谷和孝さん（名誉会長）
平田恵彦さん（副部会長）
テキスト代　一〇〇〇円（岩波文庫ワイド版『古事記』を使用）。
資料代　そのつど一〇〇円程度。

忘年会で盛り上がろう！

毎年恒例の忘年会を以下の通り開催します。今年、返信用葉書を同封しなかったためか、申し込みがわずかしかなく、このままでは、開催できないのではないかと会長以下、事務局員一同心配しております。今からでも遅くありません。皆様ふるってご参加下さい。

日時　一二月一三日(土)
　午後六時～八時
会場　サンピア福山
　福山市緑町九-七
　☎〇八四九(二一)三一三一
会費　六五〇〇円
(税込み・和食会席料理・飲み放題)

◆当日、午後二時三〇分に福山駅北口から送迎バスが出ます(終了後も福山駅までの送迎バスが出ます)。これは当日開催される特別歴史講演会に合わせたものです(忘年会参加の方はなるべく講演会にもご出席ください)。

◆忘年会にご出席希望の方は、事務局(〇八四九―五三―六一五七)まで電話でお申し込み下さい。

現在受付中！

勝手ながら準備の都合上一二月一日(木)までにお申し込みをお願いします。

『山城志』第一五集の原稿募集

原稿最終締め切り
一二月三一日（水）年内到着分まで

編集時間等の関係で締め切り後に到着した原稿は掲載できない場合がありますので早めにお送りください。もうこれ以上の締め切りの引き延ばしはしません。

原稿は一人何本でもかまいませんが、内容審査の上採否を決定します。投稿されても掲載できない場合がありますので予めご了承下さい。

版形はB五サイズで、縦書き二段組です。ただし、一覧表などは横書きでもかまいません。

本文はタイトルページを除けば、「三二字×二二行×二段」でちょうど一ページです。ワープロ原稿の方はこれに字数を設定してください。

四〇〇字詰原稿用紙ですと約三枚半にあたります。掲載ページ数は最大二〇ページ（四〇〇字詰原稿用紙七〇枚）まで。ただし、図版などは除きます。

写真も掲載可ですが、費用が余分にかかりますので、枚数は常識の範囲でお願いします。皆様の力作を期待しております。

会員の皆様、来春の発行を楽しみに待っていてください。

事務局日誌

▽一〇月一一日・一二日（土・日）
秋の一泊旅行「出雲・石見の旅」参加四一名。詳しくは本号の塩出さんの文章をどうぞ。

▽一〇月一八日（土・昼）
『古事記』を読む。参加二〇名。

▽一〇月一八日（土・夜）
『備後古城記』を読む。参加一三名。

▽一〇月二五日（土）
郷土史講座「系図から歴史を読む」参加三〇名。講師　杉原道彦さん。

▽一一月一日（土・昼）
「松永湾岸の古墳見学会」。長波古墳・松本古墳などを見る。広島から新人小原さん合流。参加一三名。

▽一一月一日（土・夜）
役員会。運営を協議。参加一七名。

▽一一月八日（土）
『古事記』を読む。参加二三名。
終了後、行事案内発送作業。

▽一一月九日（日）
加茂町石造物分布調査。大林寺裏山の石仏の調査。一般参加の山本さんが大活躍。参加一一名。

▽一一月一五日（土）
『備後古城記』を読む。参加一五名。
終了後、行事案内発送作業。

▽一一月一六日（日）
徒歩例会「瀬戸町の史跡めぐり」好天に恵まれて参加六〇名。
講師　田口会長・出内さん。

▽一一月二二日（土）
「朝鮮通信使サミット」を開催。記念レセプション・懇親会に会を代表して田口会長が出席。於「鞆シーサイドホテル」。

▽一一月二三日（日）
掛迫六号古墳周辺古墳分布調査。来春出版予定の測量報告書作成のための調査。参加三名。

▽一一月二三日（日）
鞆で「朝鮮通信使サミット」を開催。鞆の町はラッシュアワー並の大混雑。メインの朝鮮通信使行列には、佐々木・佐藤錦・坂本・小林浩・塩出各氏が参加。

▽一一月二四日（月・祝）
加茂町石造物分布調査。大林寺・法光寺裏山の石仏の調査。藪こぎをして下さった井村さんの頑張りに大感謝。参加一〇名。

▽一一月二九日（土）
郷土史講座「薬師城跡について」参加三三名、講師　篠原芳秀さん。
終了後、慰労会　出席六名
於市民会館会議室。

▽一一月三〇日（日）
「吉備磐座紀行」参加一六名。
「鬼の差し上げ岩」には初探訪者一同ただただ驚愕あるのみ。

第一二回郷土史講座
特別歴史講演会
中世港湾遺跡の調査成果について
―草戸千軒との比較研究のために―

毎年恒例となった年末忘年会直前の特別歴史講演会。今年は広島県立博物館主任学芸員の佐藤昭嗣先生を講師にお迎えして開催します。

しっかり勉強して忘年会に繰り出しましょう。忘年会不参加の方も講演会だけは聞きに来てくださいね！

草戸千軒町遺跡は中世考古学の魁となった遺跡として、数多くの書籍や報告書等の出版物に取り上げられ、全国で最も有名な中世港湾都市として広く認知されています。中世考古学は草戸千軒町遺跡の発掘とともに誕生し、成長していったといっても過言ではありません。私たちはこのことをもっと誇りに思ってもよいのではないでしょうか。

ところで、草戸千軒町以外の中世の港湾都市は、現在の市街地と重なっていることが多いためか、これまでそれほど発掘されることがなかったのですが、近年全国各地で徐々に発掘が進むようになりました。その結果、比較対象が少なく、あまりよく分からなかった中世の港町の研究が進展し、その実態がある程度分かるようになってきたのです。

最近発掘された中世港湾都市としては、青森県の十三湊（安東氏の福島城下の港町。大規模な町並が発見され、現在継続調査中）、鎌倉（政治都市以外にも港湾都市としての側面もあったことが判明）があげられ、他にも三重県津市の安濃津遺跡（伊勢平氏の根拠地。平氏滅亡後も神宮の御厨として交易が盛んに行なわれた。博多津・坊津と並び日本三津と称された）、石川県金沢市の普正寺遺跡、島根県温泉津町の沖泊（石見銀山の積み出し港。毛利氏が最重要視し、防御のため鵜の丸城や櫛山城の海城を構築）等が注目を浴びています。講演ではこうした遺跡の最新の発掘成果を分かりやすく紹介していただきながら、草戸千軒町遺跡との共通点・相違点についてもお話いただきます。

また、これとは別に、若狭湾沿岸の港湾都市から発見された多くの古文書類や、現在調査中の奄美大島沖の沈没船から発見されている多数の遺物（一二世紀のもの。調査が終わり、発表されればもちろん！です）のマル秘情報についてもご紹介いただきます。

今回の講演会は絶対に聞き逃せません。

《実施要項》

日時　一二月一三日（土）
　　午後三時～五時

場所　福山市中央公民館
　　（福山市花園町二―七―二）

講師　佐藤昭嗣先生
　　（広島県立歴史博物館主任学芸員）

参加費　無料

その他　当日午後二時三〇分に福山駅北口から「サンピア福山」の送迎バスが出ます。「サンピア福山」から中央公民館へは徒歩約一分です。忘年会に参加されない方がご利用下さってもかまいません。

『備後の山城と戦国武士』出版！

葦陽文庫（版元　塩出印刷）
定価　一五〇〇円

田口義之会長が『備後の武将と山城』以後の研究成果を『備後の山城と戦国武士』としてまとめ、この一二月に上梓することになりました。「備後の中世を読む」「室町時代の備後」「宮氏の盛衰」「備後の山城と中世武士」の四章に分かれ、いずれも読み応えのある論文になっています。

中世が大好きな人にとっては堪えられない内容で、備後の歴史を学ぶ上でも格好の書です。間もなく、書店に並ぶのでご購入をお願いします。

会報八一号の原稿募集

原稿締め切り一月一六日（土）到着分（必着）まで。

編集時間等の関係で締め切り後に到着した原稿は掲載できない場合がありますので早めにお送りください。また最近は投稿が増えていますので原稿は一号につき一人一本に限ります（厳守）。

原稿は本文「一行一六字×一二〇行」でちょうど一ページです。以下三一行毎に一ページの一段になります。写真がある場合でもできるだけ二ページ以内でお願いします。

四〇〇字詰め原稿用紙を使用する場合は、下一字分を空白にして、一行一六字にして書いて下さい。皆様の力作を期待しております。

《編集後記》

予定よりやや発行が遅れてしまったことをお詫びします。

記念八〇号の内容はいかがでしたでしょうか。常連の投稿あり、新人ありで、充実しているのではと自画自賛しているのですが…。

（磐座亭主人）

備陽史探訪の会事務局〒七二〇
福山市多治米町五―一九―八
☎〇八四九（五三）六一五七